泡沫の。《うたかたの。》

風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
泡沫の。《うたかたの。》

【Ｎコード】
Ｎ７６１９Ｉ

【作者名】
風花

【あらすじ】
短編連作。主人公は平凡な少女。何を間違えたか時間を越えて過去にやってきてしまった彼女は、１人の男と宿命的な恋に落ちる。そんな彼女を取り巻く人々とのさまざまな短い話。

†完結しました！

いち、

それはきっと必然だった。たとえその結末が哀しいものだとわかっていたとしても、私達はここで出逢う宿命だったのだろう。
そこまで考えて、くすりと笑えば腹にまわされた腕にぎゅっと力が入った。

「なに一人で笑ってんの？」

一人で楽しそうにするなんてずるい、と拗ねたような声が頭の上からして、また笑う。

「初めて会った時のことを思い出してた」
「……あの時のこと、ね」

月日の経つ早さには驚くばかりだ。あの日から既に半年ほどが経ち、季節は既に秋へと移ろい始めている。

「思えばもの凄い場所で出逢ったもんだよね、俺達」
「ほんとに。……何をどう間違えたら戦場に辿りつくのよ」

だって、私はあの日いつもと同じように玄関を出ただけだ。桜の花咲く春の日に、真新しい制服を着て、新しい生活への第一歩を踏み出したはずの私は、何故か玄関と一緒に別の扉も開けてしまったらしい。気が付けば血飛沫舞う戦場の片隅にただ一人で立っていたのだった。

「あの時、ほんとに怖かった」
「何が？何が怖かったの？」

「戦場っていうのも怖かったけど、一番怖かったのはあなたよ、あなた」

とてもじゃないが忘れられない。周囲で行われている命のやりとりに呆然としていると、突然足を襲った激痛。思わず倒れ込んで痛みのもとを探せば、足に刺さった黒光りする刃物。混乱の中、声をかけられて顔を上げたその先で合った目。

それが二人の出逢いとなった。

「足の激痛も吹き飛んじゃったのよ、あの一瞬だけ」

「……俺も一瞬で何もかもわかんなくなっちまったよ」

目と目が合った瞬間、周りから何もかもの音が消えた。お互いの姿しか目に入らなくて。

魂の底から湧き出てきたかのようなあの感情は、今でも言葉にならない。

「あの時は何がなんだかさっぱりわからなかったけど、今ならわかる」

その瞬間、恋に堕ちた。

（それはきっと生まれ落ちた瞬間から決められていた、私達の宿命）

にぃ、

未来から来ました、なんて。私なら絶対に信じない。

「何をぬかすか、この娘は」

「どこぞの間者か、気でも触れたか……」

「しかし見たこともない格好をしておる。もしや魔物の類ではなかろうな……？」

だから、仕方がないと思う。話す全てが真実であっても信じてくれる人なんていないだろう。そう思ってはいたけれど、それでも誰にも信じてもらえないのはとても哀しかった。

どこかへ逃げ出そうにも、足につけられた大きな傷が私に立ち上がる事さえ許してくれない。連れてこられた“陣”といわれる布での区切りの中で、沢山の人が私を眉をひそめるようにして見ている。その視線の中には、今にも殺されるんじゃないかってくらいに恐ろしいものもあって、もしかしたらこのまま殺されるのかもしれないと思った。

だったらせめてもの悪足掻きに、と。その日、私に起きた出来事の一部始終を一番上座に座っている男の人に、尋ねられるまま話していった。そうしてようやく全てを語り終えた時、どしりとした声が「あいわかった」と言って私の話の終わりを告げる。

そうしてゆっくりと私の前まで歩み寄ってきて、唐突にくしゃりと私の頭を撫でて言った。

「そなたの話、信じよう」

「……なんで、本、当に？」

驚きのままに声を出せば、彼はにかっと笑って。

「そなたの目に嘘はない」

それが限界だった。

溢れた、涙。

（泣きじゃくる私の頭を撫でるその手は温かかった）

さん、

あんたなんか大嫌いだ。
顔も見たくないし、声も聞きたくない。いつもいつも嫌みばっかり。ざくざくと言葉で私を傷付けていく。嫌い嫌い嫌い。あんたが出してくれたお茶も、甘いお菓子もいらない。どうして私はここにいるの、帰りたい帰りたい帰らせて。ここには私の大切な人も物も何も無いじゃないの。最初は悪い夢かと思った。でも違った。寝ても起きても覚めない。お腹も空くし、傷も痛いし、本当に訳がわからないって一番思ってるのは私なのよ、ばかたれ。
やだやだやだ！触るな、私に触れるな！！出てってよ、早く！ちょ、待ったストップ、ごめんってそれはまじでやめ……

「え、ちょっと嫌だ痛ーーーーいッ！！！！」
「はいはい、消毒くらい我慢しようねぇ」

文句を言う気力も無く、目の前の男を涙目で睨んだ。

大嫌い。
（だってもとはといえばこの傷付けたのあんたじゃんか）

よん、

どうもおかしい。これは仕事で、面倒なことだけど必要なことなんだ。だって疑わなければ殺される。俺じゃない。殺されるのは俺の守るべき人間。それをちゃんとわかっているからこそ、俺は今まで忠実にそれを実行してきたはずだ。そう、今だって。

天井板をそっとずらしてつくった隙間から暗い室内を見つめる。布団の上で座り込んで、はらはらと静かに涙を落とす娘を見つめる。声も出さずに、わずかに肩を震わせて泣く姿が痛々しい、なんて思う俺はやっぱり変だ。ぐるぐると胸の中で渦巻くこの感情の名を、俺は知らない。

誰か、教えてくれ。

（何も手につかなくなって任務放棄しちまう前に）

ごぉ、

小さな楽しみができた。いつもちょうどお昼時にやってくる青年とのお茶会。縁側で素晴らしい日本庭園を眺めながら過ごすこの楽しい時間は、既に日課になりつつある。

「本日の菓子は城下で評判の焼き団子にございますが、どうでありましょうか？」

にこにこと笑う彼につられて、私の顔も綻ぶ。

「美味しいです、ありがとうございます」

柔らかな甘味に心がほぐれる。もちもちと食べる私に、彼も心なしか満足そうだ。天気の話や花の話、部下の男の話というような他愛もない話をいつも私達はする。そしてそのたびに、時代は違えども私と彼の間に違いなど何もないのだと私は思う。以前、その事を彼に話してみたことがある。彼は一瞬呆けたように私の顔をじぃっと見つめた後、静かに笑った。

“いいえ、それは違いまする”

あの時の彼の顔と言葉を、私は未だに忘れられない。

“この身はもう既に、数多の血で赤く染まって。もはや人とは呼ばれておりませぬ”

もはや諦めたように静かに微笑んだ青年と私の決定的な違いはそこ

なのだと、どうしてか納得してしまった自分がそこにいた。

鬼と人。

（だけど、甘味を並んで食べてくれるのはあなただけ）

ろく、

「いっそのこと殺したらいいじゃない！私のこと、殺せばいいでしょ！？」

こんな事を思ったのも、のどが破れんばかりに叫んだのも初めてだった。裸足のまま庭へと飛び出して、走る。

もう十分に私は頑張った筈だ。毎日見張られていたのは知っていたし、あの男からの冷たい言葉や視線、態度にもずっとずっと耐えてきた。私なりになんとか状況を打開しようと頑張っていたけど、もう無理だった。知らない場所で、知らない人達の中で、知らないものばかりの生活をすることは苦しかった。ましてや敵視されていたら尚更に。腕を掴まれて、強制的に立ち止まってしまう。振りほどこうとしても力の差は圧倒的で、悔しくて、力いっぱい拳で相手の胸を叩いた。

「私のこと殺したいんでしょ！？殺しなさいよ！殺せばいいじゃない！もう、……もう嫌だ！！」

そう叫べば、自由だったもう片方の腕も痛いくらいに掴まれて、思わず顔を上げれば激昂した男と目が合った。

「ああ殺したいよ、今すぐに！あんた未だに何の情報も出てこないし、いつあの人達を裏切って殺そうとするかもわかんねぇし、殺す理由なんて山ほどあんだよ！！俺はあの人達を守るためにここにいるんだから、あんたを殺さなきゃいけねぇんだ、本当は！今までみたいに俺があんたを殺せばそれで全てが丸く収まるんだよ！なのになのに……っどうしてだ、あんたを殺せない」

最後は絞り出すようにそう言った男の顔は苦悩で歪んでいて、思わず呆然としてしまう。

「俺は……っ、あんたに生きていて欲しいんだよ」

そう言って力無くうつむくその姿は罪悪感に満ちていて、いつの間にか自由になっていた手でそっと目の前の男を抱き締めた。

「私、ここにいてもいいの？あなたの傍で生きていていいの？」

声もなく頷いた男に、ただ涙が溢れた。

そして、自覚する。

（誰よりもあなたに認めて貰いたかったんだ、私の存在を）

なな、

つい錯覚してしまう程に、ここには穏やかな空気が流れている。今日も変わらず、空は青い。遠く、どこまでも続く空の色は私の時代と何も変わらない。もしかしたら、私の居た時代までこの空はつながっていたりするのだろうか。

「よく晴れてるね、今日も」
「洗濯物がよく乾くよ」

突然声が降ってくる事にも、もう慣れた。彼は私があまり驚かなくなって楽しくないみたいだけど、いい加減に慣れないと心臓がおかしくなりそうで怖い。
どこからか姿を現して、私の隣りにすとんと座ったところを見ると、どうやら休憩中らしい。しばらくお互いに言葉を発することもなく、ただ空を見上げていた。手に触れた温度。隣りの彼を見れば思いっきり目が合って、それから二人して笑い合った。

言葉が無くても。
（あなたが傍にいるだけで、私はしあわせなのでしょう）

はち、

「何人、人を殺したかなんて数えられる訳ねぇだろ」

馬鹿にしたように鼻で笑って、その青年は言った。

「こんな世だ。殺らなけりゃ、てめぇが殺られる」

わかるか、と彼は私に問うた。

「綺麗事じゃあ、何も護れねぇんだよ」

何も言えない私は、ただその独眼から目を反らすだけだ。

理想論。

（何もかもを、否定したくなる）

きゅう、

同盟を組むのだと、青年の口から飛び出た言葉に目を丸くした。

「殺さなくても、護る方法あるじゃないですか」

思わず笑顔になる私を横目で見て、彼もまたにやりと笑う。

「人質が、生きている間だけならな」

冷たい眼だった。

その現実。

（やってきた人質の末路を、私は知らない）

じゅう、

世の中は不思議で溢れている。

「なぁ、なんで海は青いんだろうなぁ」

がたいが良くて浅黒い肌をした、自称、海の男はぽつんと呟いた。

「お日様の光で一番海の深い所まで届くのが青い光だからですよ」

にっこりと笑ってそう言えば、彼はぽかんとした顔で私を見ていた。

「日輪ってのは何色もあるもんなのか！」

「お日様の光は虹色なんです」

そりゃすげえ！とはしゃぐ彼は、見た目のゴツさに似合わず可愛らしい。

「俺ぁてっきり、海ってのは人の涙で青く染まってるのかと思ってたぜ」

世の中は、摩訶不思議。

（例えば、そこらの女の子よりよっぽど可愛い海の男とか）

じゅういち、

夕焼け空を見ていると、不意に思い出す事がある。愛犬と一緒に歩いたあぜ道、部活帰りに一人きりで見上げた空、台所から漂う夕飯の匂いに、友達の笑い声。なんだか無性に懐かしくなって、胸が痛くなる。もしかしたらもう二度と見られないかもしれない情景を、夕焼け空は思い出させるのだ。もう見ていたくないとも思うのに、どうしてか空の赤から目がそらせない。

「……風邪ひくよ」

ふと傍らに降り立った気配に詰めていた息をそっと吐く。見上げれば、どこか寂しげな笑顔。
ぽろっと一粒、涙がこぼれた。

「ごめん」
「……なにが？」

反射的に出た言葉だったから、自分でもどうして謝ったのかわからなかった。言葉に出せなくて俯けば、左手にぬくもり。ああ、そうか。

「さみしかったんだ、私」

久しぶりに一人になって周りが静かだったから、ここに来るまでの事をぼんやりと考えていた。それはつまり、望郷の念とかいわれるもので。

「帰りたくなっちゃった？」
「……そうだね、たぶん」
「帰らないでよ」

ねぇ、ここにいてよ。
そう言って握られた手の強さに、胸の奥が熱くなる。見上げた先には、いつものポーカーフェイスが崩れた情けない顔。思わず笑った。

「ねぇ、知ってる？」
「何を？」
「私の帰る場所はね、あなたの隣りなんだよ」

だから早く仕事終わらせて戻ってきてよね、なんて笑えば、一瞬ぽかんとして、そして困ったように彼は笑った。

「……ばかな奴」

そうして二つの影が重なって、空を夕闇が静かに覆った。

私の帰る場所。
（そして私は、過去を捨てた）

じゅうに、

人は何かの犠牲なしには、何も得る事はできない。生きるということもまた然りだ。私達は生きるために、他の命を食べる。それもまた犠牲と呼ぶのだろう。

「だから“いただきます”なのですか」

お膳を前にして、その人は静かに呟いた。

「自分の命を繋ぐために他の命をいただくわけですから」

なるほど、道理ですねと微笑むその人はまるで仏様のように綺麗で穏やかな表情をする。

それにしてもこの時代に“いただきます”と“ごちそうさまでした”の習慣がないとは驚きだった。それでは、と二人で手を合わせる。

ああ、ひとつ忘れていた。

「このお膳を作って下さった方々に対しての感謝も込めて」

「……まこと、良き事ですね」

いただきます。

（たくさんの命に、たくさんのありがとうを）

じゅうさん、

「ほう……それでその方はどうなったのですか？」

きらきらと瞳を輝かせて話の続きをせがむ様は、まるで無邪気な子供のようだ。これが戦場で鬼と呼ばれるほどの人物なんだから、世の中何か間違っているんじゃないかと思う。

「記憶を取り戻した彼はその身の使命を思い出して、大きな斧を片手に再びその地へと戻りました……その梅の木を切るために」

穏やかな午後の日差しの中で語る話としてはなかなか重い物語であるが、目の前の青年は全く気にすることもなくじっとこちらを見つめてくる。

千年の梅の木の精と人間の男の恋物語。数年前に読んだこの物語の結末は、子供心に残酷さを残した。……まさかひょんなことから、そんな物語をこうして語り聞かせるはめになるとは当時の私には想像もつかなかったが、今は昔ほどこの物語が嫌いではないから不思議だ。

「……そして彼の手によって彫られた仏像によって、争いの世は終わりを迎えたとの事です」

いかがでしたか、と問えば似合わなくも難しい顔をして彼は言った。

「気に入らぬ」

「あら、何故ですか？」

私が言葉を紡ぐたびに表情を変えるほど話にのめりこんでいたのに、と私は首を傾げる。彼は拗ねたように呟いた。

「まるでそなたとあやつのような二人でしたので、このような哀しい結末を迎えてほしくはなかったのです」

千年の梅の木の精である天女と人間の男の哀しくも美しい物語。まさかそんな二人に見立てられていたとは思わず、目を丸くした。

「まぁ確かに似てるよね。魂の片割れ、なんてところとかさ」

突然降ってきた声にびくりと肩を震わせれば、話題になっていたもう一人の人物が庭に現れた。先程まですねていた青年が嬉しそうに彼の名を呼び、仕事の労をいたわる。

「んで、さっきの話なんだけどさ。もし俺とこの子がその天女と人間の男だったとしても大丈夫だよ」

「何故だ？」

首を傾げた私達を見て、彼はにかりと笑う。

「だってこの乱世を終わらさせてくれるのはあんただろう？旦那」

「……無論。そなたらの為ならば、乱世をも喰ろうてみせようぞ」

鬼が嗤う。
（そう笑った青年は、確かに鬼に見えた）

じゅうよん、

神様はいると思いますか。
ぼたぼたと落ちる大粒の涙を拭うこともせずに、少女はまっすぐに私を見上げて言った。

「さあ、わからないよ」
「なんで！？だって天女様は何でも知ってるって、母ちゃん言ってたよ！」
「私は天女なんかじゃないの」
「うそだ！だってあたし聞いたもん、ここに天女様がいるって聞いたもん」

そういう噂が流れていたのは知っていた。誰が言い出したのかは知らないが、なんてことをしてくれたのだと思う。私は何も出来ないのに、こんな小さな子供までが私にすがる。その小さな足を傷だらけにして、必死に駆けてきたこの幼子を私は泣かせることしか出来ない。
なんて無力感。

「たすけてよぉ……っ！みんな、死んじゃうっ……たすけて」

カミサマ。声にならない声で、確かに幼子はそう言った。ああ、ごめんね、ごめん。私はこの子の村に用意された運命を知っている。流行り病に冒された村の、その末路を。

「天女様……？」

泣いてるの？と言われてはじめて自分が涙を流している事に気付い

た。

「ごめんなさい……泣かないで？」

のばされた小さな手。たまらなくなって、その小さな体ごと抱き締めた。

「神様はね、誰も助けてくれないの。神様は、いつも見守っているだけ」

たぶんこの子もわかってる。わかっててもすがってしまうほど、この子は追い詰められていたんだろう。

「覚えてて。人を助けられるのは人だけで、神様なんかじゃないってこと」

だからお願い。

「あなたは、生きていて」

例え、その目に絶望しかうつらなくても。

（生きてさえいれば、その手で未来を掴めるから）

じゅうご、

急に怖くなった。一人でなにかを考えるものじゃない、と心底後悔した。この時代の夜は暗い。貴重品である灯油やろうそくなんて、とてもじゃないけど私なんかが使う訳にはいかないから、日没後には早々に床に入るようにしている。特にあの人の居ない夜は格段に早い。それは誰に言われた訳でもなく、自分で決めたことだ。……迷惑云々もあるけどそれ以上に、一人で起きていたら悪い事ばかりを考えてしまうから。

もしも帰ってこなかったらどうしよう？大怪我をしていたら？

あの人の仕事は危険なものばかりだから、不安の種は尽きない。待つという事がこんなにも怖いなんて事をはじめて知った。

床から抜け出して、からりと障子を開け放つ。細い三日月がぼんやりとした光を放ちながら、夜に浮かんでいた。

眠れない夜。

（どうか、私を一人にしないで）

じゅうろく、

「馬鹿なことをしたな」

くるくると手慣れた様子で包帯を巻く彼女は呆れたように言った。きつく巻かれた白い包帯に、じわりと赤い血の染みが浮かぶ。

「……傷痕が残るぞ」

「それは別にいいけど」

血を流し過ぎてくらくらする。そう呟けば、彼女は更にきつく傷口を縛った。途端に増した痛みに思わずうめく。

「自業自得だからな？」

あんな奴をかばうからだ、と吐き捨てるように言った彼女を思わず睨みつければ、逆に睨まれた。

「おまえにとって奴が大切な存在であるように、奴にとってもおまえは大切なんだ」

そんな相手が自分のために傷付いた、なんて。

「耐えられるか？」

それぞれの痛み。
（苦々しい表情をした彼女もまた、その痛みを知っている）

じゅうなな、

泣き出しそうだった。必死に唇を噛んで涙をこらえる。教えてもらった薬をガーゼ代わりの布切れに塗って、そっと傷口に貼る。
ほんの一瞬、彼の肩が震えた。痛むのか、と聞こうとして上手く声が出せるか自信が無かったので口を閉ざす。無言で包帯を手にとって、つたないながらも一生懸命に巻いた。なんとか巻き終わった、とほっと息を吐いたその時に名前を呼ばれて、不覚にも涙がこぼれた。ああ、泣かないって決めてたのに。

「いつも泣かせてばかりだね、俺は」

困ったように笑って、私の頭をがしがしと撫でるその手はやっぱり優しい。目の縁に溜まった涙を拭って、私も笑った。

「おかえりなさい」
「ただいま」

あと何回、こうやって私達は笑い合えるのだろう。

その優しさに救われる。

（それはきっとお互いに）

じゅうはち、

いつかは、と覚悟していた事ではあった。だけどやっぱり心が付いていかない。彼は行ってしまうのだ、主である青年と共に。数多の命が消える戦場へと彼は行く。

「行かないで。ねぇ、お願いだから」

服にすがりついた手は震えていた。

「選択肢なんて、最初からないよ」

一度はふりほどかれた手。それでも彼はぎゅっと私の手を握ってくれた。

負け戦だと、皆が言っていた。そしてそれは真実そうであるらしい。でなければ彼はこんな顔で私を見たりなどしない。

「嫌、嫌だよ。ねぇどうして？どうして戦わなきゃいけないの！？」

ぼたぼたと涙を落として泣きじゃくる私を抱き締めて彼は言った。

「ごめん、この命はあの旦那の為にある。ただあの人の為だけに、俺はこの命を使うと決めたから」

俺は行くよ。耳元で囁かれた言葉にこもる強い決意。もう止められないのだと悟った。

「じゃあせめて心は……私に、下さい」

言ってしまってから少しの後悔。こんな事言うなんて、本当にどうかしてる。だけど彼は嬉しそうな、泣き出しそうな顔で笑った。

それはもう、君の手の中に。

（たとえ傍にいられなくても、君を想う）

じゅうきゅう、

どうか許して欲しい、と。
鬼と呼ばれる青年は私にその頭を下げた。

「……何故あなたが謝るのですか？」
「あやつの主であるからです」

誰よりもそなたら二人の幸せを願っていたのに、結局はこうして引き裂いてしまった。そう呟く彼に一瞬目を丸くして、私は微笑む。彼は先発隊として既にこの地を発った。この青年もあと数刻もしないうちに、この地を旅立つ。

「顔を、上げて下さい」

あなたは何も悪くないし、私達は引き裂かれてはいないと笑えば彼は困ったような顔をした。

「此度は負け戦にございます」
「ええ、承知しております」

敵勢力十万に対し、こちらは僅か三万あまり。数の上で不利とわかっていながらも、この国を治めるあの方は戦う事を選んだ。全ては無力な民を守るために。

「皆、全てを承知しております」

そう告げれば彼は今度こそ泣き出しそうな顔をして言った。

「なれば皆とお逃げ下され」
「いいえ」
「何故！？」

だってと微笑む。

「私達がいなくなったら、誰が帰ってきたあなた方をお迎えするのですか」

だからどうか。

帰ってきて下さい。

（そう告げれば彼は深々と頭を下げた）

にじゅう、

彼らが戦地へと旅立ってから幾月かが過ぎた。戦況は相変わらず良くはないが、なんとか持ちこたえているらしいとの報せに胸を撫で下ろす。女達ばかりの城は、いやに静かに感じると気付いたのはいつだったろうか。

けほ、と乾いた咳が一人きりの部屋に響いた。すっかり温くなってしまったお茶で喉を湿らせて、文机に置いていた筆を手に取る。ぎこちないながらも懸命に紙の上に筆を滑らせて、やっと書けた漢字一文字。

草書体で書かれた昔の字なんて読めないのに、城への定時報告に紛れて届けられた彼からの文。……いわゆる恋文といわれるものへの返文に、と。昔の漢字なんて書けない私が、知恵を絞って選んだその一文字で私の気持ちくらい察してみせてよ。

……できなければ優秀な軍師殿にでも聞くがいいわ。

いとしいとしといふこころ。

（恋文を人に朗読される、その恥ずかしさを知ってちょうだい）

にじゅういち、

初めて人を殺したのはもうずいぶんと昔の事だ。訓練通りに刃を振るえば呆気なく絶えた命。記憶の中の幼い俺の心は、流れ出る血にもまったくの無感動だった。
主の命のままに動き、死ねと。
“道具”である俺は人の心など持たぬよう、そう教え込まれて生きてきた。だからそれが俺の中の絶対で、唯一の真実だった。……そう、あの人に出逢う前までは。

『何を言っている。お前は人であり、俺の一番の信頼する男だ』

己を道具など言うなと怒る主に、初めて俺を人間として見てくれた彼に、この命の限り仕えてみせようとそう誓った。

『私の帰る場所はね、あなたの隣りなんだよ』

そう微笑んだ彼女が、心底愛しくて。恋しくて。大切で。こんな感情を俺は知らなかった。気付けば俺は彼女を愛していた。無償で二人はたくさんの事を教えてくれて、与えてくれた。

……幸せだった。

腕を振るう度、断末魔が耳をさす。ああ、腕が重い。足が重い。濃

厚な血の匂いに酔いそうになりながら、俺はただ体を動かして周囲の命を散らしていく。
この身は主に捧げると誓った。
この心は彼女に全てくれてやった。そして俺は決めたんだ。守る、と。大切な人達をこの手で守る。だから。

まだ、死ねない。
（死んだらなにも守れないのだから）

にじゅうに、

ちらちらと雪が舞う。はぁ、と吐いた息は白く凍った。この地に本格的な冬が来るのはもうすぐだ。戦場にも雪は降っているのだろうか。ぐっと胸が苦しくなってけほけほと咳き込めば、手の中に咲いた赤い花。

「こんな所におられたのですか」

背後からかかった声。

「……雪が綺麗だったので」

今頃、あの人達も同じように雪降る灰色の空を見上げているのでしょうか。空を見上げて呟けば、探しに来てくれた女中も同じく空を見上げて微笑んだ。

けほけほげほっ。

身を屈めて咳き込めば、うっすら白く積もった雪の上にぱたぱたと赤い花が咲く。

「もう一度会えたら……なんてきっと無理ね」

この命が尽きるのが先か、この地が攻め落とされるのが先か。

「部屋へ戻りましょう……ここは冷えます」

ただひとつ私にわかるのは、残された時間があと僅かしかないとい

うことだけだ。

迫りくる、終焉。
（それは白い雪と共に）

にじゅうさん、

天守閣にただ1人、私は佇む。夜闇に赤々と燃えゆく町を見下ろして、穏やかに最期の時を待っていた。

この城を見送るのは病持ちの私だけでいいのだと、共に逃げようと差し出された手を断ったのは夕刻も迫る頃のこと。ならば共に、と口々に言う人々に私の分まで生きろと送り出したあの時の彼らの表情が忘れられない。これで良かったのだ。ここで死ぬには惜しい、優しい人ばかりだったから。数十日前に逝ってしまったこの城の主も、きっと皆が生きていくことを望んでいるはずだ。

ごうごうと火が燃え盛る音が聞こえる。外から内から、確実に近付いてくる死。不思議と怖くはなかった。ただ、寂しいだけ。いずれ燃え落ちる城で私はただ一人を待っている。

「……会いたいよ」

叶わない願いを口にすれば、涙が頬をつたった。

「俺だって、会いたかった」

確かに聞こえたその声に、はっと目を見開く。おそるおそる振り返れば、夢にまで見た彼がそこにいた。

「あれ、おかえりって言ってくれないの？」

言葉も出ない私に向かって、彼は血と泥にまみれた顔で笑う。そう

してゆっくりとその両腕を広げた。

「おっと！」

勢い良くその腕の中へと飛び込めば、待っていたといわんばかりに抱き締められる。

「おかえり……なさい」

「うん」

「会いたかった……！」

何度も何度もお互いの名を呼ぶ。ごおごおと城や町が燃えてゆく音が響くなか、私達は確かにお互いの心臓の音を聞いた。

ああ、生きている。

「ごめんな」

守れなかった、と彼の声が涙で揺れる。主も、国も守りきれなかったと彼は泣いた。最後の戦闘で重傷を負った主を縁のある寺へと運び込んだ後に、彼はここまで駆けてきたのだという。鬼と呼ばれたあの青年は『行け』と微笑んで彼を私のもとへと送り出してくれたのだ。

「なぁ、一緒に行こう。俺と共に生きよう」

力強く私の手を握ってそう言う彼に、涙が溢れる。その言葉をどれほど聞きたかったことか。でも、そんな事は許さないとでもいうように、ぐぅと喉が締まった。

げほげほげほ。

とっさに口を覆った手の指の間からしたたり落ちる鮮血。目線をあげれば呆然と言葉を無くしている彼と目が合った。

「まさか……肺病、を」

「ごめんね」

彼の目に映る絶望。私の命がもう長くないと悟ったのだろう。

「二人で生きていけたら……それだけで幸せだったのにね」

涙が溢れた。

痛いくらいに抱き締められて、泣きじゃくる。

「ちくしょう」

震える肩。彼もまた泣いていた。

がらがらと、何かが崩れるような音がする。はっと我にかえった彼は私を抱き上げると猛然と走り出した。揺れる視界の中、目を閉じた私が次に目を開けるとそこは小高い丘の上。ぼんやりと霞がかる意識の中、眼下で城が町が燃えていた。たくさんの思い出がある大切な国が、燃えていく。頬につたった涙を無骨な指が拭った。

「……ここな、この国一番の桜が咲く山なんだ」

抱きすくめる形で私を支える彼は耳元でそう囁く。

「桜が好きなんだろ？」

ずいぶんと前に言った私の言葉を覚えていてくれたのか。

「今はまだ咲いてないけど、もうすぐ春だ。きっと今年も咲く……だから」

一緒に見ようと告げた彼に私はうなずく事ができなかった。今までの沢山の出来事が頭の中を次々とよぎる。まるで走馬灯のようだ。突然時代を超えてから一年にも満たない短い時間だったけれど、私の人生で一番重要な時間だった。幸せだった。苦しい事も悲しい事もあったけど、二人でいられたらそれで幸せだった。ぽたぽたと水滴が頬を叩いて、そしていつの間にか閉じてしまっていた目を開ける。

彼が泣いていた。

ますますもって霞ゆく視界に、いよいよ時間切れなのだと悟る。ああ、せっかく生きて再び会えたのに。神様とやらは酷く残酷だ。ごめんね、とささやけば彼は顔を歪めて首を横に振った。

「生きて」

あなたまで死ぬなんて、耐えられない。私の分まで生きて、そして。

「いつか……もっと優しい運命の中で、出逢えたらいいね」

それは彼に限らず、この時代に来て出逢った沢山の人達にもいえることだ。みんな必死に限りある命を生きていた。そんな彼らに、別の運命の中でまた出逢えたならどんなに素敵だろう？

「あなたに、出逢えて良かった」

「ーーーー死ぬなっ！」

頼むから、とそう叫んだ彼の声すらもはや遠いのが悲しい。これが

最期だ。

「ありがとう……私、幸せだったよ」

今、心の底からそう思う。彼に出逢うために、私はきっとここへ来たのだ。全てはきっと必然。ぎゅっと手を握って、彼は涙を拭った。

「輪廻転生って知ってるか？魂は廻り廻って再びこの世に生まれ落ちるんだ。……なあ、生まれ変わったその時には、今度こそ共にいきよう。必ず、必ず見つけ出すから」

だから待ってろ、約束だと笑う彼。嬉しくて、切なくて私も笑った。この出逢いが必然なのだとしたら次もきっと逢える。それならば私にできる事はただ一つだ。

「未来で待ってる」

そして私の世界は閉じた。

さよならは、いらない。

（輪廻の向こうでまた逢えると、信じてるから）

にじゅうよん、

その遺体は桜の下に埋められた。
遺された男の慟哭を、彼女は知らない。

魂は巡り巡って還ってゆく。
ただ一つの約束を抱いて。

泣きながら目を覚ました。長い夢を見ていた気がするが、内容は全く覚えていない。ただ、部屋のハンガーにかかった真新しい制服を見たときに酷く懐かしいと思った。

「いってきます」

真新しい制服に身を包んで、玄関の扉を開ける。不思議な既視感(デジャヴ)。何故か前にもこんな事があったと思うが、今日が入学式なのだからそれは無い。首を傾げながらも歩き出す。電車に乗ってまだ馴れない道を歩けば、見えてくる校門。その先に立ち並ぶ桜の花は満開で、風に揺られてざあっと花弁を散らす。
目頭がじわりと熱い。なんだか泣きそうだ。泣くほど桜が好き、と

いう訳でもないのに胸の奥が熱くなる。今日の私はなんだか変だ。
なんとか平常心を取り戻そうと視線を動かしたその先に、一人の男子生徒。どくん、と一つ心臓が大きな音をたてる。気付けは私は彼に向かってゆっくりと歩き始めていた。そのまま、彼の顔がはっきり見える位置まできて、そして私は目を見開く。
脳裏を駆ける、記憶の残像。

「やっと見つけた」

笑顔でそう言った彼に、涙が溢れた。

果たされた約束。
（いつか夢見た、満開の桜の下で）

にじゅうご、

彼女は覚えていないのか、とかつての主である男は俺に尋ねた。その疑問に俺は一言、是と返す。
彼女とこの時代で再会を果たし、そして共に過ごすうちにわかったのだが、彼女はどうやら当時の事を断片的にしか覚えていないようだった。その一方で、俺とかつての主はあの頃の事を全て覚えている。

「……寂しくはないのか」
「まあ、ちょっとは」

誰もが必死に生きていたあの頃の思い出を彼女と分かち合えないのは、正直いうと寂しい。短くも濃密なあの時間には嬉しい事や悲しい事、いろんな事があった。彼女に伝えたい事がたくさんある。だけど。

「でもあんたなら分かるだろ？……現代を生きていくのに、あの時の記憶を全て思い出すのは酷だ」

あの頃は誰もが生きる事に必死だった。生きるためには……誰かを、何かを護るためには力が必要だった。そうして、たくさんの血と涙が流れたあの時代。
今でも、時おり夢を見る。戦場に立つ、血塗れた己を。

「だから、これ以上思い出す必要は無い」

そう言い切ればかつての主は空を見上げたまま、そうかと満足げに笑った。

「まあ、俺の事を少しでも覚えていてくれたって事が一番嬉しいからさ」

「……惚気か」

「うん」

呆れたように溜め息を吐く彼を笑えば、窓の外から俺の名を呼ぶ声。視線を向ければ、笑顔で彼女が大きく手を振っていた。笑顔で手を振り返す。

「もし彼女がお前の事を覚えてなかったら、どうなってたんだろうな」

「そんなこと、決まってんじゃん！……意地でも思い出させてやるさ。こっちは気が遠くなるような時間、想い続けてきたんだから」

それに例えもし、俺も彼女も記憶が残ってなかったとしても。確信してるんだ、きっと俺達は。

何度でも恋をする。

（それが必然だから）

にじゅうろく、

昼からの授業はとにかく眠い。いくら怖い先生の授業だとしても、迫り来る眠気というものにはなかなか逆らえないものだ。
かくん、と首が揺れる。だめだ。いま寝たら死ぬぞ、私。なんて自分に言い聞かせてみて、眠気覚ましにと視線を窓の外へそらす。どこかのクラスは体育らしく、わあわあとボールを追いかける姿はとても楽しそうだ。羨ましい。……あ。

「おお、ナイスシュート」
「どっちが勝ってるんだ？」
「うー、得点板まではさすがに見えない……」

ってあれ？
私はいま誰と話してる？
冷や汗がつぅっと背に流れるのを感じながら視線を動かせば、目の前には先生。

「で？授業はちゃんと聞いてたんだろうなぁ、おい」

あはは。乾いた笑いしか出てきません。誰か助けて、なんて思っても誰も助けてくれるはずもなく。

「……覚悟はいいか？」

やるしかないさ、女は度胸だ。笑ってごまかせ。

げんこつ3秒前。
（痛みのあまり、机の上で悶絶）
（クラスメートはみんな爆笑）

にじゅうなな、

さいしょはぐー、じゃんけんぽん。

「……また私？」

あはは、よろしくねと無邪気に背を押す友人達を恨めしげに見ながら教室を後にする。階段を降りて、目指すは体育館横の自販機コーナー。

ちゃりん、と小銭を入れてボタンを押す。紅茶に緑茶、コーヒーに炭酸飲料。あとは自分の分だけだ。

「あれ？」

かちかちとボタンを何度か押したところで、それが売り切れである事に気付く。

「うそ……最悪だぁ」

楽しみにしていた分の反動でガックリと肩を落とせば、背後から声をかけられる。

「悪い、たしか俺で最後だった……って、え？」

振り向いてみて驚いた。なんとも懐かしい、欠片となった記憶の中で見た顔だった。向こうも驚いているところからして、彼も私の事を覚えているのだろう。

「久しぶり……だね？」
「お、おう」
そう言ったきり固まってしまっている彼の手にあるものを見て、思わずにやける。
「お、お前覚えて……！？」
「……変わってないみたいだね」
可愛いと呟けば、はっと手にしていた物を凝視して顔を真っ赤に染め上げた。
「う、うるせぇよ！やる！」
そう言うやいなや、手にしていた紙パックを私に押し付けて逃げ出した彼にしばらく笑いが止まらなかった。

いちごみるく。
（甘くて美味しい、ぴんく色の定番飲料）

にじゅうはち、

珍しい人物と二人きりになった。今生でも隻眼の彼は、いまとても穏やかな表情で隣りに立っている。教室の窓から二人見上げた空は、あの頃と変わらずに今も青い。

「まるで嘘みたいだよな」

「嘘？」

「天下を求めてあんなにも人は死んでいったっていうのに、今じゃあんなのが嘘みたいに平和だ」

お前は覚えてないかもしれないけど、と彼は前置きしてから

「俺は人殺しだったんだぜ？」

と笑った。

沢山の人を斬った。全ては天下の為に。今でも時々夢に見る。積み重なった死体の上に立つ、血塗れの自分を。

そう呟いて、彼は俯く。

「こんな……幸せに生きてていいのかってよく思うんだよ」

どこか苦々しく吐き出した言葉。俯いたままのその頭をぱこんっと丸めた教科書で叩いた。

「あ、良い音」

「……てめぇ」

凄む彼に笑いかけた。

「それでも、私はここであなたと逢えて良かったよ」

友達になって、ちゃんと同じ景色を見られるようになった。それがとても嬉しいんだと笑えば、きょとんとした後にようやく彼も笑った。

「顔、赤いよ」

「……うるせえ、ばぁか」

ありがとう、を君に。

（照れたように呟かれた言葉に、ただ頷いた）

にじゅうきゅう、

ドロップキックってどんな技？

それは私の好奇心からきたほんの些細な疑問だった。姉弟喧嘩をしたという友達の会話に出てきたその単語が、不意に頭に浮かんで思い付きで口にした。ただそれだけだったのに。

「てめぇ上等だぁ……表に出やがれ！」

「ここグランドなんだけど。そのセリフ古いんじゃない？ねぇ」

「それを言うならお前の髪型も時代遅れだろうがよ」

「ちょ、ヘアバンド馬鹿にすんな！バカ！」

ぎゃあぎゃあと顔を突き合わせて怒鳴り合う三人の友人達を遠巻きに見て、溜め息。いい加減帰りたいのだが、一緒に帰る約束をしているため帰ろうにも帰れずにいるのだった。再び溜め息をついたその時、背後からかかった声。

「どうした？」

尋ねられて騒ぐ三人を指差せば、返ってきた苦笑い。

ドロップキックってどんな技か聞いてみただけなのにとぼやけば、なるほどわかったと鞄を置いた彼。そして私が声をかける間もなく三人に向かって疾走。呆然と見つめる私の視線の先。彼は勢いよく両足で地面を踏み切ると、

「げふっ！！」

容赦なく両足で一番背の高いその人の背を蹴り飛ばした。

なるほど、あれか。ドロップキック。

一人納得する私に満面の笑みで手を振る彼がやけに眩しかった。

百聞は一見に如かず。

（つまりは実践が一番手っ取り早いということだ）

さんじゅう、

一人で過ごす昼休みは、外の非常階段で過ごすことにしている。午前中は日光で照らされているが正午を過ぎると校舎の影となるその場所は、コンクリートに直接座り込んでも体が冷えない快適さがお気に入りだ。部活の合間なんかに昼食を食べるのはいつもここだ。お弁当を食べ終わってひと息つく。ふと視線を上げた先に青空が見えた。校舎の窓ガラスに映った、あおいろ。綺麗ではあったけど、どこか切なかった。本物の空よりも少しくすんだ色は、まるで色褪せた写真のようにも見える。

『……帰ってきて下さい』

『二人で生きていけたら……それだけで幸せだったのにね』

一瞬、脳内に映し出されたのは忘れたはずの光景。はっと息をのめばすぐにそれは消えてしまった。

窓ガラスの中の青空。
（忘れたくなかった想いの記憶さえも、映し出して）

さんじゅういち、

夕暮れの中を、二人で歩く。短い時間だけど、一日のうちでこの時間が一番好きだった。線路沿いの道に長く伸びた影を追いながら歩けば、子供みたいだと笑われた。

「まるで夢みたいだよね」

不意にそう言った彼はまるで私の知らない人のような顔をしていて。ああ、あの頃を思い出してるんだなとすぐにわかった。きっと共に夕日を眺めていた事もあったのだろう。こんな時、断片的にしかない自分の記憶が悔しい。覚えてない空白の時間の中で、私は彼とどんな会話をしたのだろうか。

「……ねぇ、いまの私はあの頃から変わった？」

さあね、と笑って彼は少し先へと歩いて、そして振り返る。

「　　」

がたたん、がたたん。

通り過ぎる電車が立てる音に掻き消された声は、私に届かず消えた。

聞こえない声。
（それでも笑ってくれるから、傍にいられる）

さんじゅうに、

夕暮れの中を二人で歩く。短い時間だけど、一日のうちでこの時間が一番好きだった。線路沿いの道に長く伸びた影。追いかけながら歩く姿がまるで子供みたいで笑った。

「まるで夢みたいだよね」

ずっと前にも、二人で夕日を見ていた事があった。あの頃は確かな未来なんて何も見えなくて、来るはずの明日でさえ信じられなかった。いつ誰が死んでもおかしくはなくて。あの子もいつ未来へと帰ってしまうのかわからなくて。そうやって怯える自分の心に、いつも気付かないふりをしていた。そしてそれは今も同じ。また失ってしまいやしないかって、本当はいつも怯えてる。

ねえ、とあの子が言った。

「いまの私はあの頃から変わった？」

一瞬、どくりと跳ねた心臓。今の顔を見られたくなくて、さあねと笑って少しだけ前を行く。

変わったといえば変わった。当たり前だ。だって今とあの頃じゃ生きる時代が違う。生きてる重みが違う。

……それは俺も同じ。

くるりと振り向けば、どこか不安げなあの子の笑顔。そんな不安そうな顔しなくたって大丈夫だよ。俺は俺だし、君はやっぱり君なんだ。

なあ、そうだろう？

「今も昔も、愛してる」

そう言った俺の声は通り過ぎる電車の音が掻き消してしまって、
君に届かなかったけど。
今はまだそれでもいいと思うんだ。

いつか届ける声。
（だからどうか、変わらず傍にいて）

さんじゅうさん、

『……ねぇ、もう眠いよ。疲れたもう無理』

「何言ってんの。まだまだこれからでしょ、頑張りなって」

今夜、もう何度この会話を繰り返しただろうか。時刻は既に深夜二時をまわっている。こんな時間まであの子の声が聞ける、なんて嬉しかったのも最初だけ。そろそろこの電話越しの攻防にも疲れてきて、机の上に広げられた教科書やノートの上にぐったりと突っ伏す。明日は朝から定期試験なのだ。普段から真面目に勉強していれば、前日になってこんなに焦ることも無かったのだろうけど、残念ながら俺もあの子もそんなに真面目じゃなかった。

睡魔に負けて次の日にいつも後悔するから、と電話という提案をしたのはあの子だ。お願い助けてと涙目で縋られれば、俺に断れるわけもなく即答で了承。むしろ頼られた事が嬉しかった訳だが、できれば今からでもいいのでその言葉を撤回したい。

『……、』

「ちょ、寝ちゃダメだって！起きろコラァ！！」

深夜二時十五分の攻防。
（聞こえたのは、電話越しの寝息）

さんじゅうよん、

それはあまりにも突然だった。幸せはこんなにも呆気なく終わるものなのかと、私は痛い程に知っていたはずなのに、わかっていなかったみたいだ。
今度こそずっと共にいれると思っていた。
今度こそ、同じ世界で同じ時間を二人生きていけると信じて疑っていなかった。

それなのに。

ああ、どうしていま私はここにいるの？ねぇ、どうして私達はこうなってしまったんだろう？
心臓の拍動に合わせて、単調な機械音が永遠のような時を刻む。消毒液の匂いに満ちた、白い白い無機質な空間。私の目の前にあるベッドに横たわり眠る、その人の顔が涙でぼやけてはっきりと見えない。ずっと見ていたいと思うのに、見ていたくない。矛盾してるなんてそんなことわかってるよ。だけど、どうしようもないんだ。
ねぇ、どうして。私達は何処で何を間違えてしまったの？

それを教えてくれるはずの彼は、まだ目を覚まさない。

崩れ落ちる。
（そして、私の思考はループする）

さんじゅうご、

この時代に生まれ落ちて、私と運命的な再会を果たす前の彼はそれはそれは荒れていたらしい。あの頃の記憶を生まれながらにして受け継いだ彼は、その影響の性か人とは少しばかり違った子供であったという。簡単に言えば、冷めた子供。何にも興味を示さず、誰とも関わろうとしなかったその子供は、周囲の大人や子供の誰もから“異質”とみなされた。

『仕方の無いことだ。俺達も皆、似たようなものだったから』

同じくあの頃の記憶を持って生まれた友人は、そう言って苦笑した。

『皆は少しばかり変わったけれど、あいつは本当にあの頃のままだった。触れれば切れる、まるで鋭い刃のようだった』

あの頃を過去として清算できない彼の弱さだと、友人は哀しく笑う。あの頃も今もあんなに優しい彼が、と信じられない私に友人はすっと目を細めた。

『……あなたに出逢う前のあやつはまるでよく出来た人形のようだった。あなたに出逢って、あやつは人の心を知ったのだ。そしてあの日あなたを失って、あやつは再び人の心を失った。ただ一人愛した者を失い、取り残されたその絶望をあなたは知らない』

それがどういうことかわかるか？

静かに問い掛ける友人に、私は何も言えなかった。何と言えばいいのか、わからなかった。

『あの日に交わした約束の通りにここで再びあなたと出逢い、あやつはまた人の心を得た。だが“あの日”の絶望はきっと永遠に消えない。……今はまだ綺麗に覆い隠せているかもしれないが、そんなのいずれ必ずボロが出る。それを、“今”のあなたは受け止められるのか？』

あの頃と同じ瞳をして問う友人は、今も変わらず彼の主なのだと気付いた。

だけど私は？今の私とあの頃の私はきっと違う。あの頃、彼は確かに私を愛してくれたけど“今”の私は彼が求める私では無いかも知れない。それが私はずっと怖かった。だからずっと見ないふりをしていた。

だけど。

『私はあの頃とはきっと違うし、心が特別強いわけでもない……だけど、私が彼を大切に思ってる気持ちは今もあの頃も変わらないから。彼が好きなの。どんな事があっても、それは変わらない。だから、受け止めてみせる……この先何があっても』

そう言い切った私に、友人はひとつ頷いて、背を向けた。

『これだけは言っておく。あやつを変えるのは良くも悪くもいつもあなたなんだ。あなたは時間を超えてやってきて、世界を変える事は出来なかったが、あやつの運命だけはその手で変えた。……それだけは覚えておいてほしい』

いずれあのような形でその言葉の意味を痛感する事になろうとは、その時の私には想像もできていなかった。

運命を変えてしまった女。

（いずれこうなる事を、友人はあの時既に知っていたのか）

さんじゅうろく、

『……お前が奴の女、だな？』

部活帰り、一人きりの私の前に現れたのは数人の他校生。いかにもガラの悪そうな彼等は何故か私の事を知っているようだった。戸惑う私をあっという間に取り囲んだ彼等は、強引に何処かへと連れて行こうとする。何かまずい事に巻き込まれた事を感じて必死に抵抗するも、ことごとく無駄に終わり、私は身動きを封じられて知らない建物の中に転がされた。

『貸せよ』

そう言って私から取り上げた携帯を慣れた様子で操作して、そして。

『もしもし？』

耳に届いたのは彼の声。その瞬間、一気に血が引いていくのを感じた。下卑た笑い声が広い建物の中に響く。薄暗いその場所には、気付けば信じられない程の人数がいて。その手に握られた木刀や鉄パイプといった武器を見て、ああこの人達は彼を殺す気なのだと真っ白な頭で思った。

何か言えよ、と携帯を押し付けられる。無言で首を横に振った。嫌だ、絶対に声なんて出すものか。

ばちん。

派手な音がして、横倒しに倒れる。力任せに頬を張られた痛みは後

からじわじわと来た。

『助けに来てって言えよ』

誰が言うものか。私が声さえ出さなければ、彼は来ない。
頑なに口を噤む私を、誰かが容赦なく殴った。殴り合いのケンカなんてしたことの無い私は、その痛みと衝撃であっという間に意識を飛ばしてしまったのだった。

助けてなんて、言えない。
（ただ、あなたを護りたかった）

さんじゅうなな、

目が覚めた時には、辺りは真っ暗だった。あちこちがズキズキと痛む体。その痛みによってしっかりと覚醒した私の耳に届いたのは、悲鳴だった。

今までに聞いたことの無い、形容しがたい音が何度も何度も響く。ガラスの砕け散る音、何かが叩きつけられたような音、固いものが砕けるような音、物が落ちたり倒れたりしたような音、そして水音。最初は聞こえていた怒号も、そのうち悲鳴に変わって。

『あの子は何処だ！？』

彼の怒鳴り声だけが嫌に鮮明に聞こえた。

『……ここ！私は、ここにいるよ！』

思わず応えるように張り上げた声に、全ての音が止んだ。そして小さな靴音と共にフラリと私の前に現れた彼。小さく名前を呼ばれて、抱き締められる。手足を封じていた縄を解きながら、彼は何度も私にごめんと謝った。濃密な血の匂い。私に触れた彼の手は血に濡れていた。

『怪我……したの？』

『え？』

『血が……』

『ああ、これ……俺の血じゃない、から』

闇に慣れた私の目に映った、哀しげな笑顔。よく見ればその頬にも

血が付着していて。思わず絶句する私の目に次に映ったのは、彼の背後に振り上げられた鉄パイプだった。

声を上げようとしたその瞬間、くるりと振り返った彼は片手で鉄パイプを掴むとそのまま壁へと叩きつけた。ぎゃ、と短い悲鳴を上げてくずおれたのは一人の男。

『あんたらさ、自分達が何したかわかってる？この子連れ去って傷付けて……。そっか。また俺からこの子奪うつもりだったんだ？あの時みたいに』

聞いたこともないような低い声で彼はそう言って、ぐぃっと男の首を掴んで持ち上げる。

『ひぃ……っ！！ば、ばけもの！』

『そーだよ。なぁんだ知らなかったの？……こっちは人間なんてとうの昔に何千人も殺してんだ。ケンカ売る相手も方法も、全部間違えちゃったみたいだね』

ばいばい。

そう言って首を掴む手に力を込めようとした彼に私は必死ですがりついた。

冷たい瞳、血に濡れた手。
（そして気付いた。あの時の別れが彼を深く傷付け、変えてしまった事実に）

さんじゅうはち、

結局、彼は誰も殺してはいなかった。

『とにかく探す事を優先してたから……だけど、あの頃の俺だったら確実に殺してたよ。さすがに今の俺は武器なんて持ってないしね』

そう笑った彼は、けれども一度も私と目を合わせなかった。

『あの日、あなたが死んでから後……あやつは確かに人の心を失い、変わった。それはあなたの責というわけでは無く、あやつの弱さだったと俺は今でも思うのだが、それでもあなたの死がきっかけとなったのは事実だ。……それだけ、あやつにとってのあなたの存在は大きかった』

かつて彼の主であった友人は、そう言って泣き出しそうな顔で笑った。

『あなたを失って、あやつは絶望と哀しみの中で再び人の心を失った。そして誰よりも忠実に俺の与える任務をこなしていったよ。それはそれはできた部下だった……』

あの時代で迎えた私の死後、そうだ確かにあの後も世界は続いていたのだと、その世界で彼は確かに生きていたのだと気付かされた。頼む、あやつを解放してやってくれと頭を下げた友人に私は何も言えずにただ頷いた。涙がぽろり、と零れて床に染みる。頭の中はまだごちゃごちゃしていて、どうしたらいいかなんてわからなかったけど、でも一つだけはっきり理解していた事があった。

私も彼もこのままじゃダメだということ。
もう今までのようには過ごせない。そう思った途端に悲しいような、ほっとしたような気持ちになった。そしてその時になってようやく私は今まで不安を抱えていた事に気付いたのだ。きっと彼もそうだったのだろう。私達はまだ、あの頃を引きずって生きているのだ。
それがわかった時、私は決意を固めた。
全てを終わらせよう。さよならをしよう。

そしてそう決意したその翌日、彼は私の前から姿を消したのだった。

あの頃と今とこれから。
（さよならをしよう、新しい始まりを迎えるために）

さんじゅうきゅう、

彼が消えた。私の前から。
まだ何も伝えてないのに、何も話す事ができていないのに。学校にも家にも、友人のもとにもいなかった。平凡な女子高生の私には使える手段なんて限られていて、だけど絶対に諦めるわけにはいかなくて。あの頃に出逢った友人達の力とコネを大いに活用させてもらって、そしてようやく街の真ん中で彼を見つけた。

『話があるの』

だからお願い、帰ってきて。話を聞いて。そう懇願すると、彼は泣き出しそうな顔をして私に背を向けた。

『待って！！　　！！』

なりふり構わず彼の名を叫んで、私も駆け出す。そんな私の背に、友人達の切羽詰まったような声がかかった。え、と気付けばすぐそこに迫る車。思わずその場で立ち止まってしまった私は、直後に何かの力で突き飛ばされて道に転がった。何かものすごい大きな音がした気がする。ゆるゆると身を起こせば、道に倒れた彼と目が合った。赤色が彼の体を染めている。呆然とする私に、彼は一度微笑んで、そしてその目を静かに閉じた。
後の事は覚えていない。気付けば白い病室に私はいて、目の前のベッドに彼が横たわっていた。

こぼれる、涙。
（ごめんね、なんて言える資格が私にはあるのだろうか）

よんじゅう、

目を覚ますと、見知らぬ天井が目に映った。消毒液の匂いが鼻につく。病院であるとわかって力が抜けた。どうやら死ななかったらしい。それにしても、まさかあそこまであの子が追い掛けてくるとは思ってなかった。そこまで行動力がある子だっただろうか？必死に、それこそ周りが見えなくなるくらいにまっすぐ俺に何かを伝えようとしていた。

一瞬、合った目。体中の血が一気に下がったような気がした。怖い。聞きたくない。聞いたら全部終わってしまう、そんな気がして。俺はあの子から逃げた。

走り出したその時、名を呼ばれ、思わず振り返る。その時俺が見たのは硬直したあの子と、あの子に迫り来る一台の車。その後は無我夢中でよく覚えていない。呆然とした顔であの子がへたり込んでいるのを見て、ああ良かった今度こそ護れた、と夢現に笑った。

「……目、覚めた？」

はた、と気付けばあの子がベッドサイドにいた。

「うん。……怪我は？」
「右足の骨折に、裂傷と打撲」
「いや、俺じゃなくて」
「無い、よ。……ごめん、ありがとう」
「良かった……」

ばか、とあの子は顔を歪める。涙こそ流さなかったけど、その瞳は真っ赤に染まっていた。きっとたくさん泣かせてしまったに違いな

い。

「あのね、話……があるの。聞いてくれる？」

静かにそう切り出したあの子に、もう逃げられないなと苦笑した。

それぞれの覚悟。

（本当は、ちゃんとわかってた）

よんじゅういち、

病院の屋上から見た空は、いつか見た時と同じようにただ青かった。

「ねぇ、いつかもこんな風に空を見上げたことがあったよね」

「ああ」

「私ね、ずっと言わなきゃいけない事があったのに忘れてたことがあるの」

目を閉じて思い出すのは、あの最期の日。

「“置いて逝ってごめん、愛してる”って」

すごくすごく遅くなったけど、あの日の私の想いを今、彼に伝えたい。

「ひとりにして、ごめんね」

そう言った瞬間、彼の瞳から大粒の涙が零れた。あの日から彼は、どれだけ哀しんだのだろう？どれだけ苦しんだのだろう？どれだけの絶望が彼を襲ったのだろう？そして彼は何度も自分を責めたに違いない。

「あの時、私が死んだのは誰のせいでもないの。だから、もういいんだよ」

もう、終わりにしよう。もう私達はあの頃を生きているんじゃなくて、今を生きているんだから。

「……前世の記憶なんて無くて、ただの俺として出逢えてたら良かったのかもな」

そうしたらきっと今よりも優しい恋ができた。それは私もそう思う。だけど。

「それでも、どんな形であれ私達が出逢えた事って、それ自体がもう奇跡なんだから」

時を超えて出逢い、恋をして。死別した後も輪廻転生を超えて、私達はまた再び巡り逢えた。それはいったいどれほどの奇跡なのか。もしも運命の神がいるとするならば、なんて優しくて、そして残酷なのだろう。

「大好きだよ」

涙が溢れた。

「大好き、大好き、ずっとずっと今度こそ一緒に生きていけるって信じてた」

彼の顔が歪む。

「だけど、やっぱり駄目なんだよ。私じゃあこれから先もきっと苦しめてしまう、幸せにしてあげられない」

もともと、一度は終わってしまった恋だったのだ、私達は。約束通り再び逢えたけれども、一度迎えた別れは静かに二人を蝕んで、そして傷付ける。だから、もう一緒にはいられない。そうわかった。

「大好き、大好きだよ。これからもずっと愛してる。だから、さよならをしよう？」

本当は泣かずに笑って言いたかった。だってこれは私達の新しい始まりなんだから。だけど、どうしても涙が止まらない。止まってくれない。

「ごめんな」

ぎゅっと抱き締められた。

「逃げてしまって、ごめんな。辛いこと言わせてごめん。傷付けて、ごめん。たくさん、たくさん泣かせてごめん」

これが最後だ。耳元で小さく、彼は囁いた。

「愛してる、愛してた、愛してる。だからきっと……」

抱き締めあったまま、私達は泣いた。ありがとう、今も昔も愛してる、ありがとう、これからもずっと大好きだよ、だからさようなら。そしてまた新しく始めよう。

今度こそ、今を生きていくために。

愛してる、愛してた、愛してる。
（だからどうか、幸せに）

よんじゅうに。

あれから、もう何年が経ったのだろう？
彼と別れてからの月日は長いようであっという間だったように思う。
彼や友人達と過ごした高校時代、それぞれの道を選んで、私も大学へと進んで、小さいけれどもしっかりとした会社に就職することができた。今は縁あって、異国の地で仕事をしている。彼もあの友人の経営する会社で、今生でもその有能っぷりを発揮しているらしい。
時折、友人達との画像付きメールが届くようになった。メールの内容は決まって近況報告と、そして確認のような“幸せですか？”の問いかけ。
不意に彼の顔を思い出して、くすりと笑う。カラン、とカフェのドアベルが鳴った。

『ごめん、待った？』
『まあ、少しね』

今日は大事な話があるんだ、と店の外へと連れられて二人で歩く。
石畳の続く異国の街並みにも、もう慣れてから久しい。異国で見上げる空もあの日と変わらず、青かった。

「Ｐｅｒ　ｆａｖｏｒｅ　ｓｉ　ｓｐｏｓｉ」

この国で、私は再び恋をした。彼ではない他の男の人を愛するようになるなんて、あの時は想像も出来なかったけど。

「Ｔｉ　ａｍｏ」
「ｌｏ　ｌ'ａｍｏ，ａｎｃｈｅ」

私は幸せです、と。メールで彼に返信しようと思う。

泡沫の。

（それはまるで、儚い夢のような恋だった）

＊あとがき＊

悲恋を書こう。
そう考えて、書き始めた物語でした。主人公は一人の平凡な少女。彼女の運命の相手は、過去の時代に生きる一人の男。登場人物の名前や容姿は、読む際に作者の作り出したイメージを固めてしまいたくなかったので、あえて書かないようにしました。なのでどうか自由に想像を膨らませて、この物語を読んで下さい。

時間を超えて発生してしまった恋愛は、果たしてどこに行くのか。そう考えた時、二人の恋の結末が見えなくなりました。悲恋は悲恋なんですが、ただ破れるだけの恋では無いような気がして。結果として、『帰着する、恋』に落ち着きました。悲恋というものは必ずしも人を不幸にするとは限りません。お互いを大切に想うからこそ、終わる恋もあります。

現も夢も、泡沫のように儚いものです。恋をした、泡沫のような時間の最後、その消えゆく間際に残るものこそを愛と呼べるのかもしれません。
そんなひとつの愛の形をこの物語で伝える事が出来たなら、幸いです。

長くなりましたが、最後にこの物語を読んで下さった沢山の方々に感謝を。是非、感想を書いて頂けると嬉しいです。この物語を読んで下さって、本当にありがとうございました。

城宮風花。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7619i/

泡沫の。《うたかたの。》

2010年10月9日22時24分発行